



稲作情報



有効茎歩合を高める幼穂形成期のケイ酸施用と根の活力を維持する水管理徹底を！

定点調査のあきたこまちは6月中旬以降、気温・日照共に確保され、草丈・㎡あたりの茎数・葉数・葉色すべてにおいて平年以上になりました。圃場や地域での生育差が見られ、移植の遅い圃場や深水または土壌還元により初期分けつの発生が抑制されたところでは茎数確保が遅れている圃場があります。生育状況に応じた分けつ促進の水管理を行い、茎数を確保しましょう。

◆6月25日現在生育状況

		草丈 (cm)	㎡茎数 (本)	葉数 (葉)	葉色
あきたこまち 秋田県平鹿地域振興局 農業振興普及課調査	本年	39.1	336	8.6	45.5
	平年比	113%	103%	+0.2	105%
	前年比	104%	90%	-0.3	105%

1. 今後の管理

◆間断灌水から中干し終了へ

幼穂の発育と一穂粒数の確保には、幼穂形成期以降圃場の水分が適切に維持されていることが重要です。**中干しは、幼穂形成期前（あきたこまちで7月15日頃）**までには終了するようにしてください。中干しした圃場の土表面は、酸化状態のため急に湛水すると根腐れの原因になりますので、間断灌水（湛水と落水を繰り返す水管理）とし、徐々に湛水管理に切り替えましょう。

おすすめ高温対策！

中干し終了後、液体ケイ酸加里肥料の水口からの流し込み又はドローンによる茎葉散布をオススメします。幼穂形成期のケイ酸施用は、高温障害（乳白・胴割れ）防止・稲体強化による倒伏軽減・病害抵抗効果、根の伸長促進による登熟促進（タンパク抑制）、割れ粒防止によるカメムシの吸汁軽減効果が期待できます。

資材名 **K S K 28（ケイ酸28.0%、カリウム17.0%）**

1.4kg入／10a用、4.2kg入れ／30a用、14kg入れ／1ha用

※ドローンによるK S K 28散布の希釈倍率は【2倍】です。ご注意ください。

◆「あきたこまちR」の幼穂形成期以降の水管理

幼穂形成期から穂ばらみ期にかけては低温に最も弱い時期となり、日平均気温20℃以下（最低気温17℃以下）の日が続き日照時間が少ない場合、障害不稔や白ふが発生することもあります。**低温時には障害不稔の被害軽減のため、幼穂形成期から穂ばらみ期にかけて10cm以上の深水とし、幼穂を保護することが有効とされています。**

また、近年出穂前後の高温で、収量や品質低下（乳白粒等の発生）の原因になっています。出穂後30℃以上の**高温が続く場合は飽水管理**（田面につけた足跡に水が溜まっていて土壌の湿潤が保たれている状態）や水の入れ替えを行い、根の機能減退を防ぐようにしましょう。

地温を下げる
飽水管理



ふるさと稲作ほっと
LINE QRコード
友だち登録をお願いします！



JA秋田ふるさと 営農経済部 米穀課 ☎ 23-6556

各営農センター

金 沢 ☎ 37-2124

大 雄 ☎ 52-3665

横 手 ☎ 32-8220

増 田 ☎ 45-2035

平 鹿 ☎ 24-3110

十文字 ☎ 44-3101

大 森 ☎ 26-4155

雄物川 ☎ 22-2266

秋田県農業共済組合横手市支所 ☎ 32-4150

農産課（農作・畑作・損防）

☎ 32-4404

家畜果樹園芸課（家畜・果樹・園芸）

☎ 32-4407

建物農機具課（建物・農機具）

☎ 32-4119

収入保険課（収入保険）

☎ 32-4229

秋田県平鹿地域振興局 農林部 農業振興普及課 ☎ 32-1805

横手市農林部 農業振興課 ☎ 32-2112・32-2113

◆カドミウム吸収抑制の水管理

あきたこまちR以外の品種は出穂前後3週間（7月15日～8月25日頃）は水田に常時水を張り、田面を空気に触れさせないことにより玄米へのカドミウム吸収を抑制することが必要です。**あきたこまちR**は常時湛水管理は不要です。間断灌水又は飽水管理を行いましょう。

＜出穂前後3週間の水管理＞

あきたこまちR	間断灌水又は飽水管理
あきたこまちR以外の品種	湛水管理

2. 病虫害防除

【いもち病対策】

気温が高めかつ雨が降りやすい天候はいもち病の発生リスクが高まります。

下記薬剤により葉いもち予防に努めましょう。

薬 剤 名	希釈倍数	使 用 量	成分数	使 用 方 法
コラトップ粒剤12		1 kg／10 a	1	湛水散布 出穂30～5日前まで
サンブラス粒剤		3～4 kg／10 a	1	湛水散布 出穂5日前まで
ビーム粉剤DL		3～4 kg／10 a	1	散布 葉いもち発生時の治療効果あり
ビームエイトゾル	1000倍	60～150 ℓ／10 a	1	

【紋枯病対策】

紋枯病は、前年多発した圃場では発生が懸念されます。**出穂前防除**を実施しましょう。

薬 剤 名	使 用 量	成分数	使 用 方 法
モンガリット粒剤	3～4 kg／10 a	1	湛水散布 予防・出穂20～10日前

モンガリット粒剤は、稲こうじ病にも効果あり。

3. 雑草対策

前年に多発した圃場では後発の雑草が多くみられます。ホタルイやノビエは斑点米カメムシの産卵・繁殖場所となりますので、殺虫剤による防除のみに頼らず下記除草剤を適期に使用しましょう。

薬剤名	薬量(10a)	希釈水量(10a)	使用時期	使用 方 法	成分数	適用雑草
クリンチャーEW	100ml	25～100 ℓ	ノビエ6葉期まで	落水散布	1	ノビエ
トドメMF乳剤	200ml	100 ℓ	ノビエ7葉期まで	湛水、又は落水散布	1	
バサグラン粒剤	3～4 kg		収穫60日前まで	落水、又はごく浅水散布	1	広葉雑草
バサグラン液剤	500ml～700ml	70～100 ℓ	収穫50日前まで	落水、又はごく浅水散布		
クリンチャーバスME	1000ml	70～100 ℓ	ノビエ5葉期まで	落水、又はごく浅水散布	2	ノビエ・広葉雑草
トドメバスMF液剤	1000ml	70～100 ℓ	ノビエ6葉期まで	落水、又はごく浅水散布	2	ノビエ・広葉雑草
バイスコープ1キロ粒剤	1 kg		収穫45日前まで	湛水、又はごく浅水散布	2	広葉雑草
ワイドアタックSC	100ml	100 ℓ	ノビエ6葉期まで	落水、又はごく浅水散布	1	ノビエ・広葉雑草

※クリンチャーEWは、展着剤加用で効果大（トドメ乳剤は展着剤使用不可）

※落水処理の場合、好天の続くときに使用すること（3日以上）

水の需要期ですので、地域の農業用水の状況を考慮し、大切に使いましょう。水回しの協力をお願いします。

4. カメムシ防除の実施

管内の一番多い落等理由はカメムシ被害による着色粒です。水田内に雑草が多発すると、アカスジカスミカメの水田内への侵入が助長されるため、中・後期除草剤の使用にあたっては発生雑草の生育程度を確認し、適切に薬剤を散布してください。ノビエやホタルイが多発している圃場は確実に本田防除を2回実施してください。

時 期	7 月（密度抑制）			8 月（本田防除期）		
	上 旬	中 旬	下 旬	上 旬	中 旬	下 旬
本 田	残草処理対策を実施			出穂	1 回目本田防除 出穂10日後頃	2回目本田防除 出穂24日後頃
農道・畦畔 水路法面	出穂10日前までイネ科雑草が 穂をつける前に実施する ← 草刈り →			草刈禁止	カメムシ本田防除後 （1 週間以内） ← 草刈り →	草刈禁止
休 耕 田 等	← 薬剤防除・草刈り →			← ----- 草刈り禁止 ----- →		

5. 生育・栄養診断の実施

6 月の水温上昇とガスわきによる下葉の黄化、葉色の低下が見られました。中干しによる酸素供給で、葉色が上昇しますので幼穂形成期に生育・栄養診断を実施し、出穂期まで健全な稲体に仕上げましょう。

※胴割粒の発生は出穂期の葉色低下が要因の一つですので、一発肥料にとらわれず栄養診断により適切な追肥を実施しましょう。



◆幼穂長の見極めから幼穂形成期（11.5葉期）を的確に把握する。

この時期の生育は、

■茎数の減少 ■葉色の低下 ■倒伏の診断 ■一穂モミ数の減少

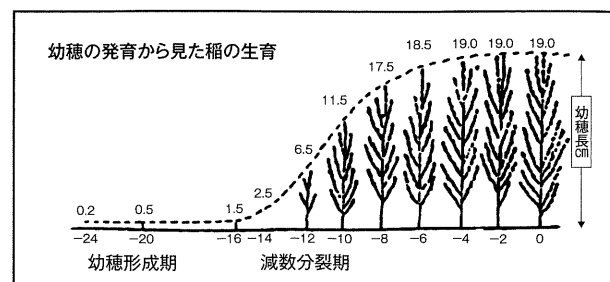
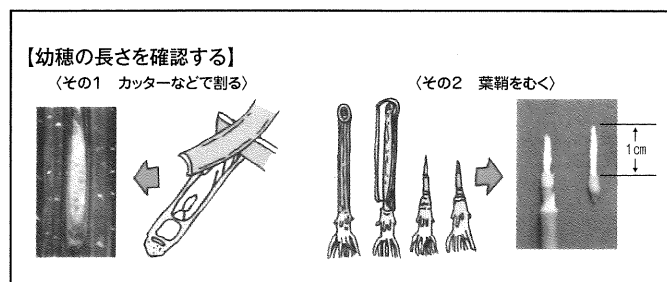
■出穂期以降の登熟度向上など、多くの要素を考慮しなければならず、生育期間中で最も重要な時期といえます。

1) 幼穂長を調べましょう！

平均的な株の一番背の高い茎を、根をつけたまま抜き取ります。葉鞘をていねいにむいて、幼穂の発育状況を見ます。株を束ねて一番葉の長い茎を引き抜き、茎の中央部をカッターで真っ二つに切ると簡単に見ることができます。

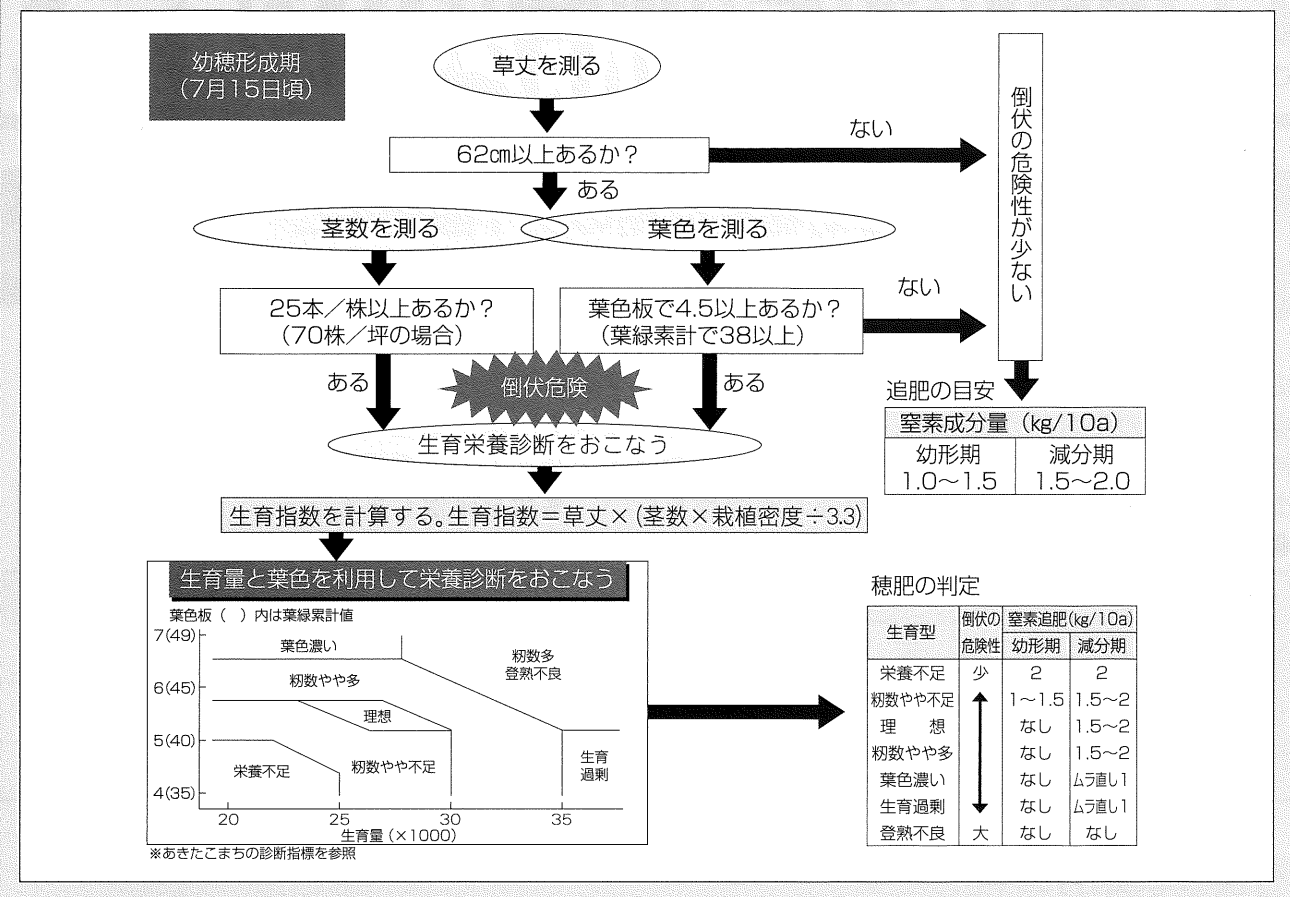
◎幼穂長が1～2mmになった時点で「幼穂形成期」となり、出穂25日前頃と出穂時期を予測することができます。幼穂長によって出穂日（期）を予測し、適期追肥やカメムシ対策（適期草刈り・防除）を計画的に進めていくことが重要となります。

2) 幼穂形成期を確認したら、「栄養診断」を実施しましょう！

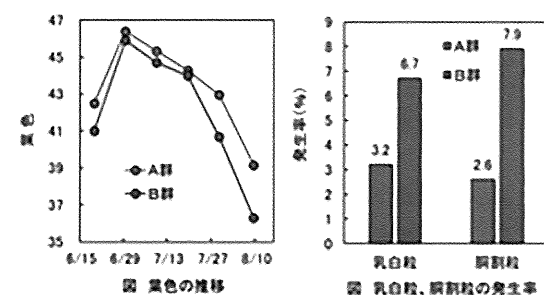


2) 幼穂形成期を確認したら、「栄養診断」を実施しましょう！

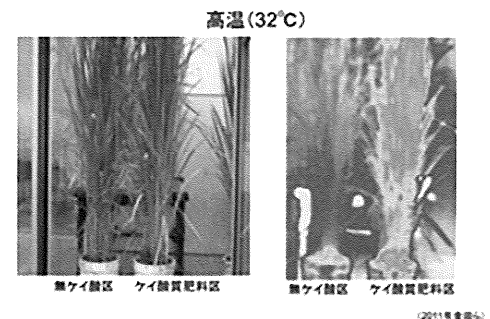
あきたこまちの幼穂形成期の生育・栄養診断（平鹿地域版）



生育後半の葉色低下が大きいと品質低下傾向



ケイ酸は高温下のイネ体温を上げない



耐倒伏耐性・病虫害抵抗性を高め、高温登熟による「乳白粒」防止対策として有効な「幼穂形成期」のケイ酸追肥を必ず実施しましょう!!

「けい酸加里プレミアム34」や「シリカ未来」などのケイ酸肥料20～40kg/10a施用（湛水又は浅水管理）が目安です。

【農薬飛散（ドリフト）にご注意を！】

- ①農薬を散布する際は、散布箇所周辺の住宅地や農作物への飛散に十分注意しましょう。
- ②風が強い日の散布は控えましょう。また、散布途中で風が強くなった場合もすぐに散布を中止し、農薬による被害発生を未然に防ぎましょう。